

●発行日：2020年7月18日（土）

〒661-0035 兵庫県尼崎市武庫之荘3-19-3 TEL 06-4962-5876 FAX 06-4962-5877 e-mail info@gakurin.co.jp

発行:教材出版 学林舎



学習の行き先 コロナによる オンライン学習の状況

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、政府は全国の小中学校、高校、特別支援学校に対して、2020年3月2日からの臨時休校を要請しました。文部科学省の調査では、全国の95%以上の小中学校、高校が臨時休校を実施したことがわかりました。臨時休校要請が出された当初は、3月いっぱいでは終息し、4月には通常通りの授業が始まると考えられていましたが、新型コロナウイルスの感染者数は4月以降急増し、休校要請が解除されたのはゴールデンウィークを過ぎてからのことでした。およそ3か月間、子どもたちは学校に通うことができず、家庭学習を余儀なくされたのです。

そのような状況下で、文部科学省が公表した「臨時休校ガイドライン」では、学習に著しい遅れが生じることのないよう、可能な限り、紙の教材やテレビ放送等を活用した学習、オンライン教材等を活用した学習、同時双方向型のオンライン指導を通じた学習などを行うように示されていました。しかし、全国に緊急事態宣言が出された4月16日時点における臨時休校中の家庭学習の取り組み状況は、「教科書や紙の教材を活用した家庭学習」の実施率が全体の100%だったのに対し、「テレビ放送を活用した家庭学習」では24%、「デジタル教科書やデジタル教材を活用した家庭学習」では29%、「同時双方向型のオンラインシステムを通じた家庭学習」に至っては5%と、いずれも低い割合でした。多くの学校・家庭でインターネット環境が整っておらず、オンライン学習が十分に実施されませんでした。

そもそも、日本は「オンライン教育後進国」といわれています。OECD(経済協力開発機構)の調査によると、学

校でのパソコンの使用頻度は、OECD 加盟国内では最下位でした。その理由の一つは、公立の学校内のパソコンやタブレット型端末の普及率の低さにあります。文部科学省もパソコンを子ども 1 人に 1 台を支給することを目指して「GIGA スクール構想」を掲げ始めたばかりでした。オンライン学習を実施するには、パソコンやタブレットなどの端末のほかに、wi-fi などのインターネット環境、セキュリティなどを整備する必要があります。また、家庭にパソコンがない子どももいます。しかし、私立の小中学校では、すでにパソコンやタブレット型端末を 1 人 1 台導入しているところが多く、臨時休校中でも円滑にオンライン学習が行えました。このように、オンライン学習への取り組みは、学校によって対応が分かれました。

一方、学習塾では、臨時休校を受けてオンライン授業の導入が積極的に進みました。全国学習塾協会が行ったアンケート調査結果によると、4月の時点で「すでに導入している」割合が全体の過半数を超えており、その中で3月から4月にかけて導入した割合は70%を超えていました。オンライン授業の導入にあたっては、だれでも無料で入手できる Zoom や Microsoft Teams などの対話型のアプリを活用する学習塾も多く見られました。1日頃からスマートフォンやパソコンが身近にある小中高生にとって、これらのアプリも簡単に扱うことができるため、円滑にオンライン授業へ移行することができたようです。

このように、私立と公立の学校、各家庭のパソコン環境、通塾の有無など、臨時休校への対応は多岐にわたっています。よい環境で教育を受けられる子どももいれば、十分に教育を受けられない子どももいるため、学力格差が心配されています。緊急事態宣言が解除され、学校は再開されましたが、1年間の学習カリキュラムを例年通りこなすのは難しいと言われています。子どもたちが平等に教育を受けられるように、オンライン学習を活用する手段もあります。臨時休校によって関心が高まるオンライン学習は、今後より一層広がりを見せるのではないかと思います。（文／学林舎編集部）



学習の行き先 オンライン授業の メリット・デメリット

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、オンライン授業の需要が高まりました。今回はそのメリット・デメリットを考えていきます。

まず考えられるメリットとして、自分のペースで授業を受けることができること、通学・通塾時間の有効活用ができることが挙げられます。オンラインでの録画配信はこれまでも Web 授業として実施されていた経緯がありますが、小学生や中学生にとっては保護者などの監視下に置かれていない状況では、なかなか集中力が続かないなど問題点がありました。このような問題を解決するために、今回需要が高まったのは、Zoom や Microsoft Teams など双方向型の Live 配信です。これを使えば、お互いの顔を見ることができ、質問や発言なども可能ですので、教室と近い環境を作り出すことができます。

自宅での授業ということもあり、これまで不登校だった子どもも参加できるようになったという話や、普段の授業では挙手して発言するのが苦手だった子どもが積極的に発言できるようになったという話も耳にしました。単に効率的であるという面以外にも様々なメリットがあったことがうかがえます。

他にも、塾の場合は帰宅時間が遅くなりがちですが、オンライン授業では自宅での受講となるため安全面においても安心であることや、有名講師の授業を受講できるなどのメリットも考えられます。

一方、デメリットは、ネット環境によっては授業中に音声や映像が途切れるということが挙げられます。また、自分の部屋で受講する場合、学校や塾とは違ってどうしても集中しづらく感じるケースもあるでしょう。さらに、同じ姿勢で画面に向かって座りっぱなしという状況では目の疲れや肩こりなど、健康を害する心配も出てきています。

また、指導する側の先生は、普段のような意思疎通やコミュニケーションができないと感じているケースもあるでしょう。ただ単に、勉強を教えるというのではなく、子どもが理解しているか、普段と様子の違うことはないか、ということに気を配るわけですから、表情や態度を見て感じるものが減ってしまうのもデメリットとして考えられます。対面での緊張感や叱咤激励は、オンラインではなかなか難しい面があります。

小学校から高等学校は現在学校が再開され、感染防止の対策を取りながら授業を行って、一部の大学では前期の授業をすべてオンラインで実施することを決めています。前期試験に関しては通常通り大学で実施するケースもあれば、すべてレポート提出になる大学もあるようです。この点で、合否を決めるような試験やその判定をするための試験をオンラインで実施するのは難しいと言えます。

ネット環境や体調面の管理などは工夫によって改善できる部分も多く、遠隔地の学校教育や海外のネイティブによる英語学習など、今後もオンライン授業が普及していくことが考えられます。メリット・デメリットを踏まえた上で、オンライン授業の有効活用が期待されます。

(文／学林舎編集部)

学習の行き先

求められるデジタル・
アナログのすみわけ

新型コロナウイルスの感染拡大防止対策として、日本全国のほとんどの小学校、中学校、高等学校、特別支援学校では臨時休校の措置が取られ、およそ3カ月間休校が続いた地域もありました。

こうした中で、学校や教育委員会、自治体では、休校期間中の生徒たちの学習を支援するために様々な手段を講じてきました。具体的には、教科書や紙の教材を活用した家庭学習や、学校や教育委員会が独自に作成した授業動画を活用した家庭学習、同時双方向型のオンライン指導を通じた家庭学習などが行われました。このことから、今後はさらに教育のデジタル化が進んでいくと考えられます。

その中心となるのが、2019年末に文部科学省から打ち出された「GIGA スクール構想」です。GIGAとはGlobal and Innovation Gateway for Allの略で、義務教育を受ける生徒のために、1人1台の学習者用パソコンと高速ネットワーク環境などを整備する計画です。当初では、「1人1台端末」を実現するための整備スケジュールを2023年としていましたが、コロナ禍の影響により、前倒しすることになりました。また、「GIGA スクール構想」では、デジタル教科書や電子黒板などのデジタルコンテンツを活用した授業や、個人の学力に合わせて提示されるAIドリルなどの先端技術を活用することが想定されるので、さらに学びの充実が進むことが考えられます。

しかし、教育のデジタル化に利点ばかりがあるわけではなく、アナログの方が適していると考えられている教育活動もあります。その例として挙げられているのが理科実験です。これまでも、理科の実験映像をおさめたデジタル教材がありましたが、実際に観察や実験を行うことで、生徒が見る、触れるなどの五感を生かすことの大切さを学ぶ機会が失われたり、教員がデジタル教材を使用することで、理科の観察や実験が行われなくなる可能性が懸念されていたため、アナロ

グの部分も残されていました。

しかし、新型コロナウイルス感染症対策は、この理科実験にも影響を与えました。文部科学省は、学校の生活様式に関する指針で、理科実験を「感染症対策を講じてもなお感染リスクの高い学習活動」と決めました。このことから、今後の理科実験については、実験グループの人数を減らす、実験台上に飛沫感染を防ぐ仕切り板を設置して行うことなどの対策や、実験の様子を別教室に配信するなどの対策を講じて行っていく可能性があります。理科実験と同様に、音楽の合唱や調理実習、体育の密集運動もまた、「感染症対策を講じてもなお感染リスクの高い学習活動」に指定されています。

今まではアナログで行うことが適切と考えられていた学習活動にも、デジタルの部分が組み込まれることが考えられます。今後の学習においては、新しい生活様式に対応して、デジタルとアナログのそれぞれの良さを組み合わせることにより、学習効果を増大させていく視点で考えていくことが大切となります。

(文／学林舎編集部)

クロスロード crossroad

第 107 回 文／吉田 良治

● 対面授業とオンライン授業

今年は新型コロナウイルス・新型肺炎の影響で、教育機関の授業は通常の教室での対面授業をすることが難しい状況が続いてきました。高校までは分散登校など3密を避ける取り組みをすることで、教室での対面授業が再開されています。一方大学では県をまたいだ登校も少なくなく、また、100名を超える大教室での授業を受けるケースもあるため、中々教室での対面授業の再開に踏み切れない大学も少なくありません。

私がスポーツマネジメント論の授業を担当する大学では、春学期全てオンライン授業で対応しており、対面授業の再開はありません。オンライン授業もライブで学生が参加するケースと、オンデマンドによる動画形式の授業の2通りがありますが、私はオンデマンドの動画形式で対応してきました。学生とライブで双方向のやり取りができないのが難点ですが、学生によってネット環境が違うため、ライブ授業だとアクセスが集中するとフリーズしたり、大学のサーバーがダウンするといったトラブルも多く、オンデマンドで学生の都合のいい時間帯にアクセスすることを選択しました。何とか15回の授業も終え、例年通り期末レポートで最終評価をすることになっています。学生、教員、そして運営する大学それぞれが、初めての経験・対応で中々うまく機能しなかった点、反省する点も少なくありませんが、無事半期授業を終えることができました。

この春は別の大学で社会人の学び直しのリカレントプログラムを担当する予定でしたが、こちらは教室での対面授業だけでなくオンライン授業での対応もしないことになりました。ただ、毎年ライフスキルの授業をさせていただいている大学が、先月より部分的に教室

での対面授業を再開させたため、回数は少なくなりましたがこの春学期初めて教室での対面授業を提供しました。通常は受講人数に合わせた教室で行う授業ですが、3密を避けることが対面授業再開の条件となっているため、教室の収容人員の1/10くらいの規模の受講人数での再開となりました。

今月は7月18日に私が理事を務める大学スポーツマネジメント研究会で、Zoomを使ったWebセミナー“ネイションビルダーを育てるアメリカの大学スポーツ”を提供します。人が集まるイベントの多く、特に室内でのイベントは、中々再開のめどが立ちません。Webを活用するケースは授業だけでなくあらゆる分野で代用ができるので、今後は感染予防という観点だけでなく、遠方で中々イベント会場へ行けない場合でも、オンラインを活用する方が便利になる、というケースが増えていくのではと考えられます。

ネイションビルダーを育てるアメリカの大学スポーツ
<https://peatix.com/event/1504697/view>

今回教室での講義をして一つだけ気になったことは、飛沫感染を避けるためマスク着用で授業をしましたので、授業時間の多くをしゃべり続ける講師は大変です。マスク着用で呼吸がしづらいため酸欠にならないよう、これまでよりも話すペースを考えることも重要です。またオンライン授業の課題は、準備に時間がかかることです。通常教室での授業もオンライン授業も、ベースの事前準備は同じですが、オンライン授業は授業データの登録など授業時間の倍以上時間がかかります。近年大学教員は授業や研究、そして論文執筆といった業務以外、学内の会議の他雑務が増えているため、オンライン授業が増えると、さらに時間的な負担が増えていきます。この点をどう克服するのか、非常に悩ましい問題と感じます。

(つづく)